奄美新聞

2013年(平成25年)10月13日　日曜日

「歴史掘り起こし活用を」

琉球弧文化観光シンポ　パネリストが活発に意見交換

「組踊」など伝統芸能披露も

琉球弧文化観光シンポジウム（同実行委員会主催）が12日、奄美市住用町の奄美体験交流館で開催された。沖縄と鹿児島の識者がパネリストとして参加し、奄美を含む3地域の文化や観光のあり方について活発な意見を交わした。また地域を代表する伝統芸能の披露もあり、終日盛り上がった。

イベントは「奄美群島復帰60周年記念事業」の一環。沖縄と同じ琉球文化圏にある奄美が「世界文化遺産登録」に向けた協力体制の確認と、鹿児島県本土を含め、今後の経済・文化の交流発展を目指している。この日は会場に用意した300席は満席。立ち見も出るほどにぎわった。

各パネリストが提言を述べた「これからの文化観光のあり方について」

重要無形文化財に指定される、沖縄の伝統芸能「組踊・執心鐘入」が披露された

伊津部小学校・さざ波バンドのオープニング演奏の後、第一部は基調講演を行い、▽鹿児島純心女子短大非常勤講師・小川学夫氏（伝統芸能について）▽琉球大学・津波高志名誉教授（伝統文化について）▽㈱カルティベイト・開梨香社長（観光について）が参加。各自意見を述べた後、ディスカッション「これからの文化観光のあり方について」を実施した。

奄美の八月踊りの成り立ちについて小川氏は「海で神を招き、集落にその力を分け与える儀式」と考え、津波名誉教授は「地域信仰や文化背景を盛り込みながら『奄美らしい文化』を伝えなければならない」と強調する。また、沖縄の有人島29カ所のエコツーリズムに取り組んだ開社長は、児童の体験交流事業を受け入れた集落の活性化を実例に上げ、主体的行動を伴った地域の取り組みを訴えた。

今後の奄美について3人は「リピーター（ガイド）とのつながりを重視」「歴史の掘り起こしと活用」―などの提言を述べた。

第2部の芸能披露では、国の重要無形文化財に指定される、沖縄の組踊「執心鐘入」（尋芸能塾）が披露された。琉球王朝時代を舞台に女性の恋心を表現した内容で、寺の住職や小坊主の軽妙な演技や、女が鐘から飛び出て鬼に変化する演出に注目が集まった。

そのほか、児童らが躍動し演舞する「創作エイサー」（那覇太鼓）や10人以上の鬼が力強く和太鼓をたたく「末吉鬼神太鼓」（鹿児島）に家族連れやお年寄り達は熱中。前山真吾さんの島唄や地元の住用町川内集落（約40人）が参加した八月踊りで盛り上げ。最後は全員で六調を踊り、ハトが鳴り大きな拍手が贈られるなかイベントは幕を閉じた。